【2013-05-11】
裏土御門　陰の長者
「幕末動乱編」

連載第八回「安政の大獄」

虹岡　思惟造

裏土御門　陰の長者「幕末動乱編」連載第八回　安政の大獄

　将軍宣下は、江戸中期以降、勅使が江戸に下向し、将軍が上座に立って行われる仕来たりであったが、今回の将軍宣下の儀式は、朝廷優位の時勢を受けて、勅使が上座で執り行われた。諸大名が参列する中、下座の家茂に対し将軍宣下をするという晴れがましい役割を全うした勅使二人は意気揚々として帰路に着き、安政５年11月、無事、京都に帰着した。
　数日後、御所に参内した高倉侍従と土御門晴雄は孝明帝に拝謁し、任務履行の報告を行った。帝は朝廷の権威を天下に示したことを嘉(よみ)し、その労を労った。勅使の随行員であった溥明もその場に従っていたが、帝は溥明に対しては早く身辺警護の任務に戻って欲しいとの仰せであった。溥明が留守にしている間に、御所内に不穏な黒い影が忍び込んできており、帝を不安にさせていたのである。

その翌日、蔵人所に出仕した溥明であったが、御所内の雰囲気が様変わりしているのに驚いた。御所内の誰もが息を潜めているようで、静まり返っているのである。つい最近まで御所内のいたる所で声高に議論していた急進派の公家達の姿はどこにもない。
　溥明は、帝の休息の時間に内裏の藤子を訪ねた。久しぶりの逢瀬であり、限られた時間という思いもあって、溥明は忙しなく、藤子を抱き寄せて口づけをした。脂粉の匂いと、焚き締めてある香の匂いが欲情をそそる。平素にない荒々しい溥明の行動に、藤子は少し驚いた風であった。それでも抗うことは無く、溥明のなすがままに身を任せていたが、やや経って溥明の耳元で囁いた。
「溥明様、離しておくれやす」
　溥明は藤子を抱きしめる腕の力を抜いた。
「済まぬ、つい手荒なことをしてしまった」
　一時の激情が過ぎ去り、急に気恥ずかしさがこみ上げてきた。
「うれしおす。うれしおすえ」
　大人びてきたとは言え、まだ十七歳である。それだけ言うのが精いっぱいなのだろう。
「ところで、御所内の様子が変わったようですが」
　溥明は話題を変えた。二人の間の気づまりを解消しようと思ったのだ。
「へぇ、そらもう、えらい変わりようどす」
　乱れた衣服を繕いながら、藤子は御所の代わり様について語った。

　～溥明等が江戸に下向するのに入れ替わるように、老中の間部詮勝が上洛してきたが、着任早々、京都所司代の酒井忠義の協力を得て過激攘夷派に対する詮議を開始し、手始めに幕府批判の急先鋒と目される近藤茂左衛門、梅田雲浜、橋本左内等を相次いで捕縛した。その追求の手は公家の家臣にも及び、三条家、鷹司家、近衛家等多数に渡り、遂には青蓮院宮家や有栖川宮家にも及ぶようになった。捕縛された者達は江戸に護送され厳しい詮議を受けるという噂が御所内に伝わり、一大恐慌に陥っている～

「なるほど、それで御所内の誰もが息を潜めるようにしているのですね」
「そうどす、公家の家臣は未だどなたはんも捕らえられてへんようどすけど、所司代や奉行所に出頭を命じられてはるもんは仰山おるとのことで、やがてはわが身に災厄が降りかかるのではないかと、公家はん方は戦々恐々としてはるのどす」
　このところ内裏の奥向きにもこの話が伝わり、和宮も痛く心配しているとのことであった。
「なにやら、途方もない事態に発展するような予感がします・・・、私の危惧に過ぎなければよいのですが」
　溥明の言葉に、藤子も心配そうに頷いたのであったが、図らずも、溥明のその危惧は的中することになる。

　安政の大獄は、安政5年8月に条約締結違勅の勅諚を水戸藩に下賜したことがその発端とされる。実は幕府に対してもその勅諚は下されたのだが、急進派の公家などの工作により、幕府よりも先に水戸藩に伝えられるように仕組まれていたのである。密勅は8月7日深更、万里小路正房より水戸藩京都留守居役の鵜飼吉左衛門に下ったが、吉左衛門の持病が悪化していたため子の鵜飼幸吉が代わりに受領、東海道を潜行して16日深夜に水戸藩家老安島帯刀を介して水戸藩主徳川慶篤にもたらされた。その様な最中、鵜飼吉左衛門から、安島帯刀宛ての書簡を幕吏が押収するところとなり、その内容が井伊暗殺計画に及んでいたことから、徹底的な弾圧を井伊大老に決意させたのである。
　安政6年8月に、徳川斉昭とその実子である一橋慶喜らを処罰したのが断罪の始まりで、この時、斉昭は永蟄居、慶喜は隠居・謹慎を申し渡された。同時に処罰された大名の多くは将軍継嗣問題で井伊と対抗した一橋派の者達で、尾張藩主徳川慶勝、福井藩主松平慶永、土佐藩主山内容堂、宇和島藩主伊達宗城などが隠居・謹慎の処分となった。
　朝廷側で処罰されたのは、水戸藩への密勅に関与した者が中心であった。上は青蓮院宮尊融法親王、下は近衛家老女にいたるまで総勢二十数名に及ぶという途方もない規模である。そして、同年10月に橋本左内、吉田松陰等が斬首に処せられて漸くにして、弾圧の嵐が止んだのである。
　この大弾圧により、幕府の威光が回復したかに見えたが、それもつかの間で、翌年の安政７年３月、桜田門外の変が勃発するや、幕府の権威は前にも増して急速に衰退して行く。

その日は、3月3日の雛の節句であり、通年であれば暖かい春の日差しがある頃なのに、未明からの雪により、井伊家の江戸藩邸がある江戸城桜田門の界隈は白く覆われていた。

一向に振りやまぬ雪にも拘らず、道の両側には、武鑑を手にした大名行列見物客がいて、次々と登城する行列を眺めていた。辰の刻（午前8時）を告げる太鼓の音が城内から聞こえ、暫くして彦根藩邸の門が大きく開かれると、赤い合羽に揃えた五十名ほどの一行が静々と現れ出でた。赤い甲冑で統一した井伊の赤備えはつとに有名であるが、雪装束も赤で揃えていることに、見物の者達は感嘆の声を上げた。

門を出て五丁（500メートル強）ほど行ったところで、行列の先頭に飛び出した男が「捧げまする、捧げまする」といって駕籠訴をするようであったが、羽織を脱ぎ棄て、腰の刀を引き抜くと、前に立ちはだかった、行列の供頭にいきなり切りつけた。これとほぼ同時に、銃声が鳴り響くと、それが合図であったのだろう、道の両脇から、数名の者が抜刀して井伊の乗る駕籠に殺到した。彦根藩の警護の侍は、厳重な雪拵えをしており、刀の柄には袋をかぶせ紐で結んでいた。そのため警護の多くの者は、柄袋の紐が解けず応戦も叶わぬ内に、次々に斬られて辺りの路上を血で赤く染めた。雪がいよいよ激しく降りしきる中、駕籠に何度も刃が差し込まれ、井伊直弼が、外に引きずり出されたときはすでに瀕死の状態であった。襲撃者の中で、一際大柄な者が、猿叫を発して井伊の首を打ち落とした。この間、四半刻（30分）もしなかったであろう。

事件後に襲撃者は、水戸藩と薩摩藩の浪士によるものとすぐに知れた。襲撃した者達の多くは、反撃を受けてその場で死亡したり、現場から少し離れたところで、精根尽きて自刃したりした。この事件は、徳川譜代筆頭で武門の誉れ高い彦根藩の行列が、わずかな数の浪士に襲われ、しかも駕籠の主が首を打たれたということで天下に衝撃を与えた。幕軍の精鋭を自任した彦根藩が、わずかな浪士達に大敗を喫したことは、“幕府恐るるに足りず”との思いと、テロリズムの効果を広く世間に行き渡らせることとなった。

かくして、京都は天誅と称する殺戮の巷へと化してゆくのである。

～以下次号に続く～